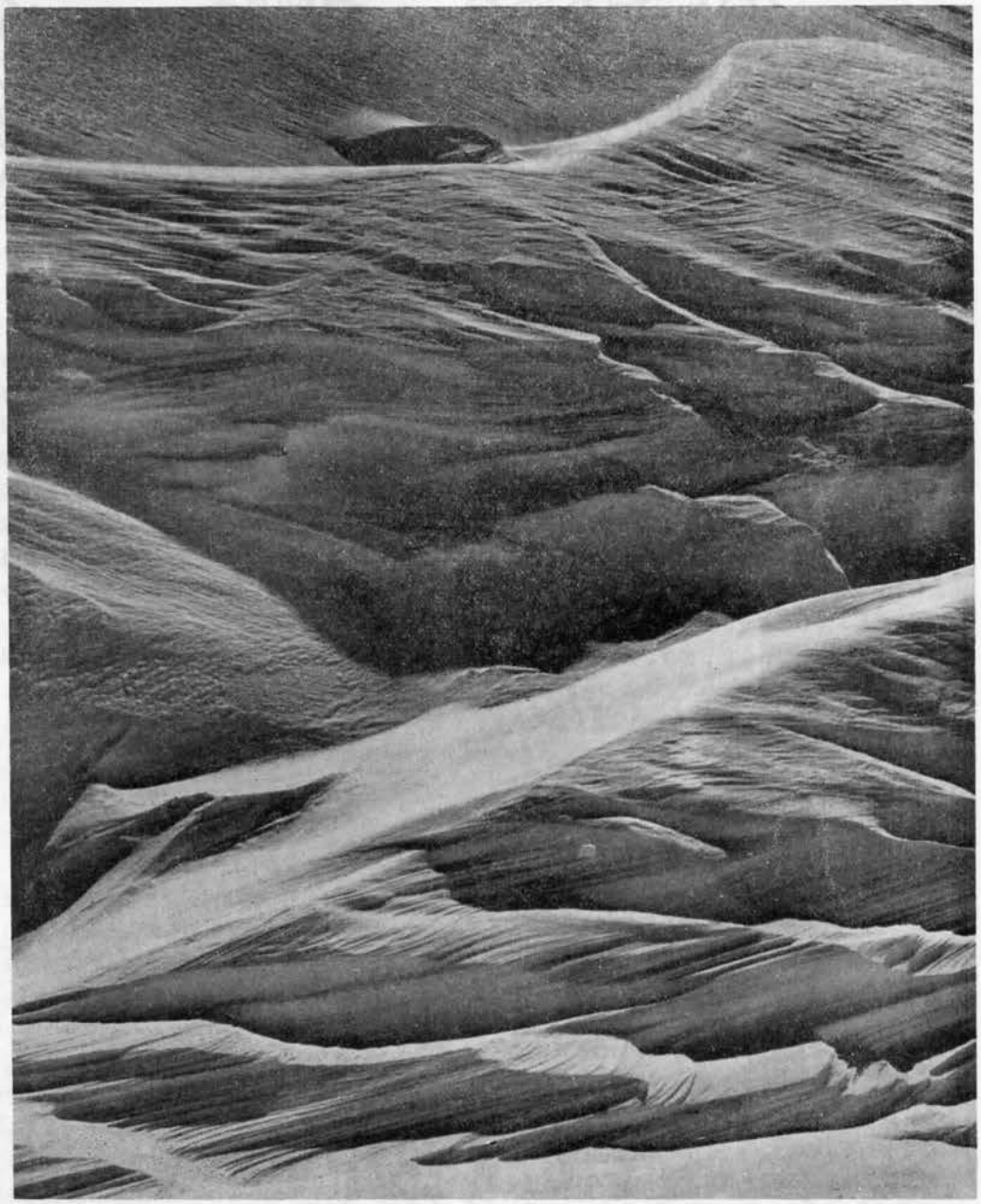
毎月1回20日発行　第3種郵便物認可(昭和31年3月28日)　①

山と博物館



雪ひだ

昭和電工大町工場
石原守明

すばらしく晴れた、きさらぎのある日―。私はたゞ一人きりで黒沢高原の深い雪の中をラッセルしていた。この日の目的は爺ケ岳や鹿島槍などの撮影だったが、全く人の足跡一つない雪の高原のしごまは神秘そのものだった。その折ふと発見したのがこのモチーフで厳しい吹雪のあとにつくられた雪のフォルムに、私はしばしカメラも忘れていた。

第3巻　第12号　1958年12月20日　大町山岳博物館

大町を囲む山々

その地名を追つて

大町山岳会長 平林武夫

たぶん昭和の10年頃だったと思うが、当時大町の小学校にいた桔梗栄二先生が大町から眺められる西の山々を写生し、小生が山名や標高を付して当時の四年生の郷土誌の資料として謄写印刷したものが今でも横額などになってところどころに見られるが、あんがい当時の地元の人々は山名も山のようすもごぞんじなかったのでこうしたものが地元の人々の観光資料として役立ったようである。それには南は常念、燕の峯から北は白馬岳、小蓮華、乘鞍の肩までが画かれている。しかしその中でもっとも大きくクローズアップされているものは何と言っても餓鬼、北葛、蓮華、爺、鹿島、五竜と言ったいわゆる鹿島連峯の峯々で、これがまあ大町の人たちの昔から称えた西山の峯々であるに違いない。

餓鬼岳という山名ほど聞いても読んでもそら恐ろしそうな名前は他にあるまいが、その名の起元もまた判然とはしていない。しかしこうした麓の人里から眺められる山の名前は何か意味あるものと思われるが現在のところ、崖岳（がけだけ）から転化して（がき）岳になり餓鬼の文字をあてはめたものとも思われるし、また爺ケ岳、鹿島槍岳などにくらべて雪も消えかたが早く針の木峠などから眺める標高も低いので大人に比して子供、すなわち餓鬼どものような小さな山、という意味から名づけられてしまったのかも知れない。

北葛岳は高瀬渓谷の支流北葛沢の頭であるからであろう。沢名がその源流の山頂の名前となっているものもたくさんある。ことに西山には之が多く、今関電トンネルの赤沢岳は赤沢の頭であり、岩小屋沢岳は岩小屋沢の頭である。また鹿島槍の荒沢の頭が荒沢岳と呼ばれたこともあった。

蓮華岳はその山容が蓮華の花によく似ているのでそんなところから名づけられたものであろう。事実この山は大町にとっては一番身近な山であり、またもっとも親しみ深い山であるこの蓮華の山ほど山名と山の状態が平和的で静的な山はそう沢山はない。

針の木岳は榛（はんのき）沢の頭から名づけられたものであろうが二つ並んでいる蓮華、針の木という言葉は偶然ではあろうが極楽と地獄の両面を表現しているようにも見られる。事実針の木の方は針の山のごとく險峻である。

スバリ岳という山名は五万分の一の地図にもカタカナで記入されているので外国語名の山名のような感じを与える。中には星座のスバル座のスバルから名づけられた山名であるというようなことが昔はものゝ本に書かれたことがあるが、これは岩巣が張っている山、すなわち岩巣張りの山が転じてスバリ岳となったものと思われる。すだにから転じたものともいわれている。

赤沢、岩小屋沢などは前述の通りであるがこれらの山が大町附近の人は今でも西山と呼んでいるし、また屏風などと呼んでいるが確かに屏風のさまを呈している。

爺ケ岳は北アルプスというよりも日本中の山名中でも珍らしい山名であるが、これは安曇野の人々にはもっともなつかしい山名で五月の始めともなれば山頂の一角に現われる種蒔爺さんが安曇野の農家の人々の気象的目安として重要な役割を果してきたのは最近まである。ラジオの天気予報をきいて農事に処する人たちが多くなったとはいうものゝいまだに爺ケ岳の種蒔爺さんを眺めて苗代に種おろしをする人も少くはないであろう。

鹿島槍ケ岳は鹿島の奥のとがった山という意味であろうが、大町から眺める西山の中では一番アルプスらしい鋭峯を二つ揃えて中空高くそびえている。この山は最近山岳文学の寵児として売り出している。井上靖の（あした来る人）の中にもでてくるし、週刊朝日の（黒い画集）の中心地域も鹿島槍である。鹿島槍の北面の北壁は恐らく北アルプス中穂高連峯、劔岳連峯とならび称されている岩場で、玄人筋にとってはもっともみ力のある岩場である。この北壁の低部が、いわゆる鹿島のカクネ里と称せられているところであるが、これが果して平家の落人の伝説としての鹿島のカクネ里であるかどうかは別として、地形学上からは日本における最低部にある雪渓をもったカール地形であることはなかなか興味深いことである。

五竜岳は餓鬼岳と並んで恐しい山名であるが別に竜に特別な関係をもっているとも思われない。ゴリウはゴリヨウからの転化だとも思われる。五菱か御菱かということも推測ではあるがこの山麓では岩のことをヒシと呼んでいることはご承知の通り。ところで五つの岩が雪消えからクッキリ眺められるから五菱となり、さらに五竜と転じたものだとする説と、この四カ庄平は武田信玄の勢力範囲だったところから武田の紋どころである武田菱に似た岩形が現われているので武田の紋所を敬称して御菱岳から五竜岳に転じたものという説もある最近後立山をゴリウ岳だと称したと称える人があるようであるが、これは全く根拠のないことで、一体後立山などいう名称は大正末期にいゝ出された俗称で立山連峯を正面としてその奥の後ろの方にある連峯という意味に外ならない。

八方岳は八方尾根の最高部であり、唐松岳は八方尾根とは別の峯である。しかし大町からは同一地点に峯をのぞかせているのでちよっと見分けがつきにくいが、唐松は八方の奥に三角形の峯をのぞかせている

白馬鑓ケ岳は大町から眺めると白馬岳より高いように見えるが標高はやはり白馬岳が一番高い。これはとがっていてヤリのように見えるからで、これも山容から名づけられた山名である。

杓子岳は杓子沢のつまりに大きなカール地形をなしている雪渓がちようど杓子のように見えるので名づけられた山名である。

白馬岳は北アルプスの代名詞にまでなった山であり近代登山期のもっとも早期に開発された山である。大正の時代に大町が登山口として売り出したのはこの白馬登山のためであったといっても過言ではあるまい。鉄道の終点としての大町はまた登山の準備の町として大きな役割を果していたこともまた事実であった。しかしこれらの八割は白馬登山のためであった。白馬を今は（ハクバ）と発音しているが、これは（シロウマ）であって代馬である。この代馬も農業気象の目安として重宝がられたもので今の白馬乗鞍の一角に黒い形の馬の姿が雪消えで現われると土地の農家の人たちは代かきを始めるのであって、この代かき馬から代馬岳となり白馬岳となったのである。この山は信州側では白馬岳と呼び地図にも書物にも現在は白馬岳となっているが越後方面、越中側では大蓮華岳と呼んでいる。道の導標などにも大蓮華岳何粁と書かれている。

さて東側に目を転すると霊松寺川であるがこれはいうまでもなく寺領からの名称であろうし、また鷹狩山は領主松本藩の鷹狩の場から出たものであろうが、これはむしろ大町側よりは八坂側から名付られた。

当時の政治的勢力は犀川流域の方が強かったであろうから藩主の鷹狩など八坂側で行われたからである。

大町をめぐる周囲の山々の極めて大ざっぱな概要を述べてみたのであるが、これらの山々には歴史上に秘められた伝説も多いであろうし、また学術的、資源的に未開発の山々も極めて多いことゝ思われるが、それらの問題については今こゝで詳述するゆとりを持っていないし、

また私のよく及ぶとこいでもない。

と　にかく黒部の開発などの事業がすゝめば自然の様相というものはちよっと想像のつかない変遷をすると思うが時代の然らしむるところで、これもまたやむを得ないことであろうが、ただ望みたいことは開発の限界と、保存の限界をはっきり区別してもらいたいことである。保存すべき自然の姿を崩してしまっては真の意味の観光などということは到低考えられないであろう

（編注　※本稿に掲載の展望図は桔梗栄二先生の画かれたものです。）

信州文学碑散歩

（12）

屋代高等学校教諭　福沢武一

芭蕉句碑　長野市城山県社

午前のうちに用事がすむ。さて自由な身になった僕は目的地へ飛んでいく。城山の県社へ。そこには次の芭蕉句碑が立っているはず。

月かげや四門四州もただ一つ　　芭蕉

放送局の前の公園地は雪が一面に積っている。横切って台地にとりつく。日曜日なので、写真機を携えた行客の人影が目にとまる。

きざはしを上り、神社の境内に入る。横あいに善光寺の大屋根が陰黒々と見やられる。この重々しさはとりもなおさず一句の重厚さと同じもの。芭蕉もこうした小高みから月明下の善光寺を見おろして作句しているに相違ない。芭蕉句碑は台地右手のやや肩さがりの雪の中に立っている。ずかずかと雪をふんで碑に近すく。白っぽく物ふりた自然石へ肉太に一句が刻まれている。必ずしも達筆ではない。そこから重厚さが生れてもいる。

碑の高さ124センチ。巾90センチ。碑蔭に、

二条殿代官月院社男尺木堂大宗匠建焉

月院社といえば、市内吉田町の俳人何丸（1761～1837）の号。その子（男）**石木堂公石**（1792～　）が建碑者だから、年代は天保8年（1837）以後かと考えられる。あにはからんや、天保3年、何丸が公石の名儀で建てたものである。（信濃風土記6「更級記行」による）

早速拓本を初める。風が丘東から吹きつけ、大困難を来たす。碑面は勝手次第にひずんでいる。

紙をなだめなだめタンポンをたたく。ぬれた紙は見る見る乾いていく。肩の方からめくれ落ちてもくる。辛じて仕上げたとき、われに帰ってほっとする。拓本を乾かす間、昼食のサンドウイッチをかじる。――雪の中にうずくまったままで。芭蕉句碑の並びに、やゝ離れて、長方形の句碑が立っている。碑蔭の細字が読めず、この碑の調べはまたの機会にゆずる。句は、

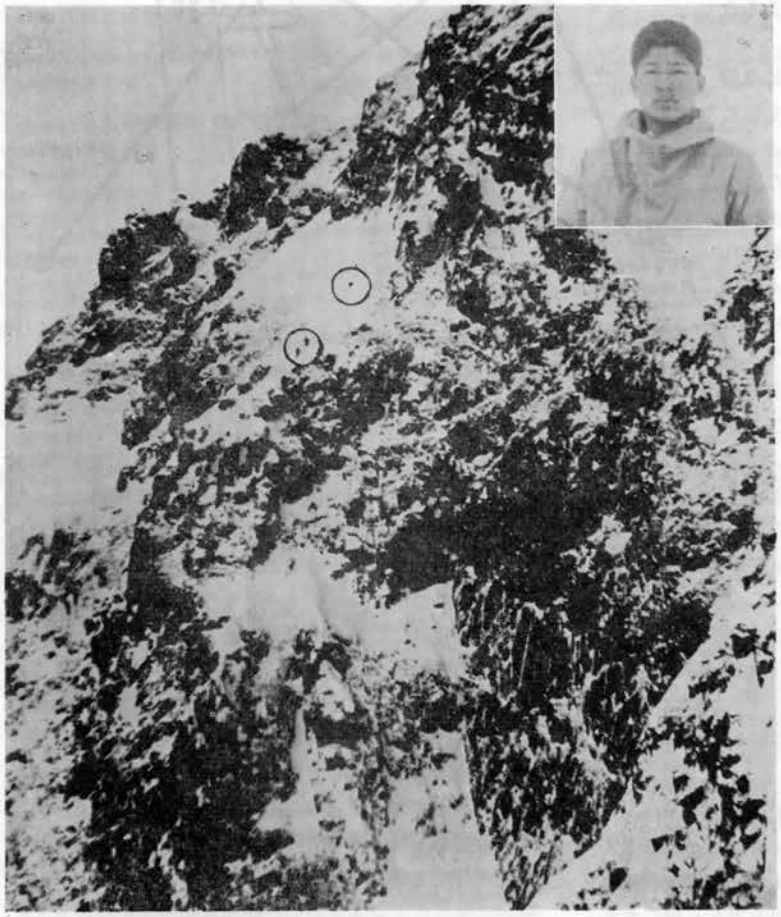
弼（かゆ）たくは上手もいらぬ寒さかな　武曰居士

これら二つの碑る脊後は、――雪の降りこめられた市街地。遠く高井の方面まで見晴らされる。昼陽射は明るいけれど、まだまだ春遠い眺め。

電車が丘下を走っていく。その先、桐原、吉田と北につらなる家並も読みとれる。その辺が月院社何丸の生地公石の故郷その雪景色は遠い世を追想する僕にひとしお印象深い。

ナイロンザイル事件

大町山岳博物館学芸員　海　川　庄　一



昭和30年元旦午後3時頃一川3名が岩壁下部を登り切つて第二テラスにあらわれたところ、遭難者最後の写真（中央）右上は遭難した若山五朗氏

昭和30年1月2日、前穂高岳頂上直下の東面絶壁でおこった岩稜会（三重県鈴鹿市、顧問須賀太郎氏ほか50名）に属する若山五郎（当時三重大学一年19才）の墜死事件は、当時としてはまことに不可解な事件とみられ、ナイロンザイルの切断をめぐって、一つの社会問題にまで発展した。この事件は登山界だけでなく各方面の注目を浴び、朝日新聞連載小説井上靖氏の「氷壁」のモデルにもなった。しかし、今なお必ずしも正しい解決を見ていないので、ここにこの事件の概要をとり上げてみた。

＝眼前を落ち行く友＝

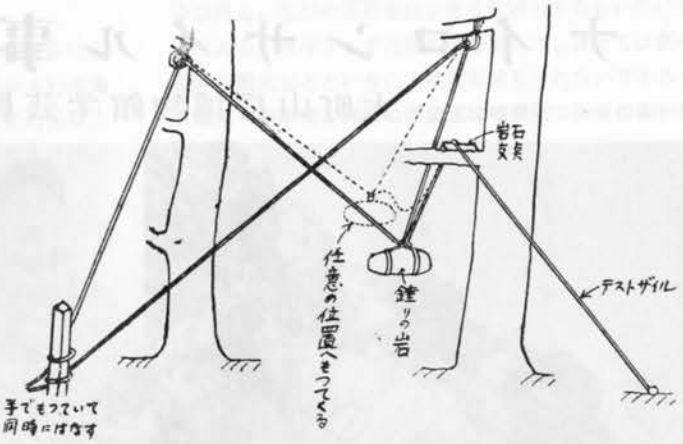
一行のリーダである石原国利君（当時中央大学四年）の手記を追って遭難の経過をみよう。「一行三名は上高地を経て奥又白にベースキャンプを設定した。30年の新春1月、私（石原）は沢田栄介君と若山五郎君とパーテイーを組んでテントを出発、同午後三時頃Aフエース直下の第二テラスにたどりつき最後の攻撃にかゝった。吹雪のため視界がきかずやむなく岩のタナで三人が身を寄せ合って、零下20度の寒さの中で一夜を明かし二日朝再び吹雪の中で攻撃にかゝった。あと30m、私は眼前にそゝりたつ氷壁にアタツクをかけた1回、2回、3回、歯を食いしばってよじ登ったがだめ、替って二番の若山君が絶壁にいどんだ。頭上の岩にナイロンザイルをかけ、3mばかりよじ登った時、若山君の左足が滑り落ちた。一瞬のできごとである。直径8mmのナイロンザイルが切れ、アッとおもう間に体はもんどりうって200mの絶壁の暗い谷間に転落していった。しかし、いまは降りるにも登るにも道をたゝれた二人は猛威をふるう大自然の非情の中で二夜を明かさなければならなかった。救援隊の現れたのは二日の午後でした。私は右手指耳などに一ケ月沢田君は両足指、右手に三ケ月の凍傷を負った。」

＝死人に口なし＝

なぜ墜死したか。死因について真相を語り得るものは現場にいあわせた生残りの二名だけであるが、リーダー石原君の発表は「若山君は200mの絶壁を墜落して行方不明となったが、それは岩角にかけたナイロンザイルがわずか50cmかそこらすべっただけで、何のショツクもなしに切れてしまったからだ。こういうことは麻ザイルではあり得ないことである。ナイロンザイルは保証付新品だし、われわれはザイルを傷つけるようなことはしていない。それがそんなにもろく切れたのはわれわれが考えてみるのにそのザイルが悪かったか、ナイロンザイルが鋭い岩角に弱いという今まで知られなかった欠陥によ

るものだと思う。というものであった。しかし、一流メーカーの生命綱が粗悪品あったとは考えられないことであり、当時登山家の羨望の的であったナイロンザイルに従来知られていないような重大欠陥があるとも思もわれなかった。

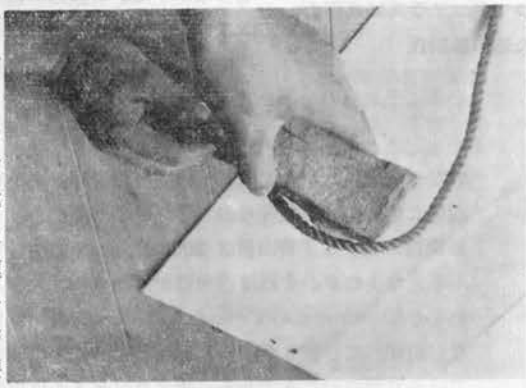
事実多く人々はこの石原君の発表には信をおかなかったのである。しかし、もしこの発表がおかしいということになると、事件はナゾに包まれて石原君にも重大な疑がかけられ、有名なスイスのマッターホーン事件のようにもなっていくだろうと思われるた。（マッターホーン事件とは……1865年エドワード・ウインパーのひきいる7名の登山者は、欧州アルプスの名峰マッターホーンの初登頂に成功、下山の途中一人が足をすべらせたので、ザイルを結びあっていた隊員はつぎつぎとひきずられ、先頭から四人目と五人目の間でザイルが切れ墜死するという事件が発生した。このとき五番目にザイルを結んでいたペーチル・タウグワルダーは、ザイルを故意に切ったのではないかという疑いをかけられた。ウインパーはこの疑を晴すため幾度も弁明につとめたのであるが、ザイルを切ったのだという当てこすりが、村人やタウグワルダーの仲間の間にさえ盛んに行なわれた。タウグワルダーは周囲の冷い眼に耐え切れず、遂に長年住みなれた村を退ち去らねばならなかっかた。）



約90度のエツジをもつた石塊を巨木の枝にのせ、約18貫（装備をつけた体重にほぼ等しい）の岩石の錘を、補助ザイルで任意の位置へもつてきて落下させる

＝なぜ切れたか＝

もし、石原君の発表のとおり、ナイロンザイルに重大な欠点があるものとすれば、当然ザイルメーカーが墜死の責任を問われる立場に立たされるのみでなく現にナイロンザイルを使用している登山者には危険防止上早速注意をうながす必要が起るわけである。このことはメーカーである東京製綱ＫＫの信用にかゝわる問題でもあった。この問題の解決は適当な権威者又は機関によってナイロンザイルの性能に関する科学的な調査が行なわれた上で、判定されるべきであり、科学的調査の問題点は岩角にかけたナイロンザイルが果して50 cmのすり落ちで切れるような場合があり得るかどうか、又同じ条件で麻ザイルの場合はどうかと云うことであった。穂高の岩場で遭難と同じ条件を再現することは勿論不可能であり又、必ずしもその必要はないのであって、遭難時の条件を満だすような実験をも含めて、ナイロンザイルの特性が明らかにされることが必要であった。このため、大阪大学教授であり、日本山岳会関西支部長でもあり、応用物理学専攻で登山用具の権威ともいわれる、この事件の解明にはもっともふさわしい篠田軍治博士がこの研究に乗り出すという発表（山と渓谷30年3月号）があり、30年4月29日には多数の登山家、新聞記者立会のもとに公開実験が行なわれたのである。この実験は東京製綱蒲郡工場で行なわれたので蒲郡事件とも呼ばれ、ナイロンザイル事件の中心をなすものである。すでにナイロンザイルの切断事故は、若山君の遭難の翌日、即ち30年1月3日（前穂北尾根、大阪市大山岳部、無傷）及び、29年12月28日（神神五峰東壁、東雲山渓会、重傷）にもあったので、遭難者を出した岩綾会をはじめ、岳界や一般社会の眼は一つにこの実験に向けられていた。



支点に使用した腰角約90度の岩角。この岩角を使つて事故のときの関係位置で錘を落下させると拡張力1,030kg の8ミリ強力ナイロンザイルはあつげなく切れ、麻の12ミリはほとんど傷がつかない

＝問題な報道＝

公開実験の結果は各紙に報道されたが、中でも5月1日付の中部日本新聞の六段ぬきの記事は、ナイロンザイルの欠陥を主張する岩綾会にとって全く意外のものであった。

5月1日付、中部日本新聞抜粋。

強度は麻の数倍

蒲郡T製綱で画期的試み

（本文）「この冬北アで相ついで起きたナイロンザイルの切断事故に対し、ザイル専門の各種テストを行うため工費百万円を投じて設けられた高さ十メートルの鉄骨やぐらを用い、阪大工学部篠田軍治教授指導によって行われたもの、当日テストに使われたザイルはマニラ麻12mm、同42mm、ナイロン8mm、同11mmの登山用ザイル四種で、1000フィート近くがこのテストに供された。テストは90°と45°の角度を持つみがかれた花こう岩のエッジ、および、カラビナを使用して、衝撃試験が21種、20°の斜面をスライデングした場合、花こう岩エッジに対するもの1種、同エッジ上で振子を利用したストローク三種など、28種類のケースについて行われたが、まず角度90°のエッジに対するマニラ麻12mmはエッジからの長さ2mの綱の先端に55kgの分銅をつけ1mの高さから落下させたところ、実にあっけなくぷっつりと切断してしまった。今まで登山家があれほど信頼を寄せていた麻の登山綱が分銅および確保地点に何ら弾力性を持たせなかったにせよ、余りにももろいに居合せた中京山岳会副会長熊沢友三郎、東京在住の有名登山家海野治良氏らは〝あっ〟と息をのんだほどだった。これに対しナイロンザイルは、11mmで長さ3メートル50センチのものを、エッジの上1mのところから落下（4m50落下）させてはじめて切断するという。麻に数倍する強力さをみせた。鋭いエッジには弱く、今冬の遭難もこれが原因と想像されていたが、意外な強力さをみせたわけで、東壁での問題の8mナイロンザイルも長さ3mのものを3m落下させても切れぬという衝撃及びエッジに対して強い抗力だった。……（中略）……従って、東壁での事故もエッジ上の衝撃という想像の原因は影が薄くなったようだ……（後略）……」。

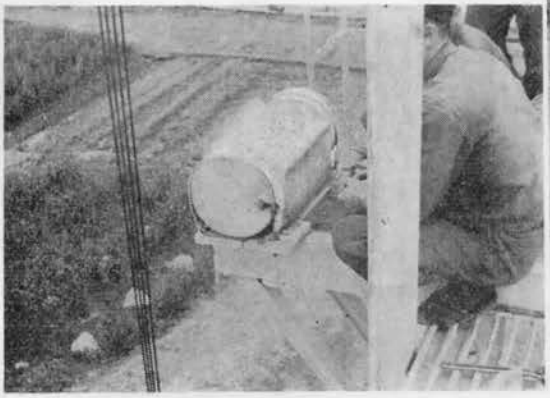
＝眞実は何れに＝

山岳雑誌に載った見解も「ナイロンザイルは欠点がない」というものが圧倒的であった°山と渓谷193号（30年7月号）には〝ナイロンザイルはどうなるか〟というアンケートが載せられたがナイロンザイルの信頼性を強調するものが多かった。「例えばその中でK氏は……篠田先生により実験は高速度撮影されてあらゆる面が判明しました。（と言ってまだ完全とは言えません）私としては、誤れる使用によるザイル切断かということです。……」と云っている。

「化学」30年7月号には「誰も第三者の見ていないところで起った失敗であるから、当事者は出来るだけ、罪をナイロンに帰せようとする気持もわかるが、もし本当にナイロンそれ自身に弱点がありとするなら、切れた綱を再検討すればよいわけなのだ。日光に曝されることによって脆弱化するというのなら、一様に変化を受けている筈である。一ケ所だけがそう簡単に切れたとすると、どうしても知らない間に傷つけたものと考えた方が妥当である。……」という遭難者に対してはまことに気の毒な見解も発表された。

一方30年7月31日遺体が岩壁直下で発見されたが遺体に結はれたザイルの切れ口は岩角での切断を示し、又8月6日の現場調査の際、ザイルが切れたという岩角にナイロンの屑が発見された。その岩角を石膏でとり下山後それとよく似た岩角で実験したところ、事故をおこしたザイルと同種のザイルはあっけなく切断し、これに反して麻ザイルはほとんど傷つかなかった。（岩稜会の実験）30年12日24日、岩稜会は事件の徹底的な究明に乗り出した。

【編註】本事件に関係ある全ての資料は実兄石岡繁雄氏のご好意により、本館に寄贈されております。紙上をかりて厚くお礼申上げます。



昭和30年4月29日、蒲郡での公開実験に使用された稜角45度の岩角、この岩角で8ミリナイロンザイルは12ミリ麻ザイルの数倍の強さを示した（エツジに丸みがある）

蒲郡での実験風景

セグロセキレイ

長沢修介

雪が降ると多くの小鳥たちは南の積雪のない餌の豊富な土地へと去り、林にはわずかのカラ類が虫の卵などを寒むそうにあさっている。

雪が積ってもいつでも水辺や川原などを元気に飛びあるいているのがセグロセキレイである。体の色は白と黒、飛び方は波状である。周年同一地方にいる留鳥なので、普通に見られ多くの人に親しまれている。

この鳥はいつも尾を上下に振っているためシリフリとかイシタタキ、尾ピコ鳥など沢山の方言がある。いずれもその習性から出たもので英語の wagtail もシリフリの意味である 。地方によっ方言はいろいろある。変ったものを二三あげて見るとシリフリオマツ、オサンシリフレ、ケツフリオカメ、オハルムギマケなどその他沢山あるらしいが、女性の名前をとったのが多いことは興味深い。

1959年は猪突猛進型

—猪年にちなんで—

○…十二支は古く支那の占星術に用いた語で、年月日時につけ吉凶を示した。12という数は、一年の間に月が12回新月となり、満月となる、すなわち12の月があることから生れた。これによって天の周囲を12区劃に等分し、それらに子、丑、寅、卯、辰、己、午、未、申、酉、戌、亥の名を与え、方位も配した。

○…明年はこの12支の最後の亥に当る年。亥の解釈にはいろいろの説があり、亥（ガイ）あるいは（トジル）で草木がすでに凋落して生命の力が種子の内部に閉蔵されてしまった状態を指すともいわれる。後世、12支にそれぞれ獣を配するようになった。鼠（ネ）牛（ウシ）虎（トラ）兎（ウ）竜（タツ）蛇（ミ）馬（ウマ）羊（ヒツジ）猿（サル）鶏（トリ）犬（イヌ）猪（イ）。

○…この12支から今も人を占い、その生年月日などにより性格、運命判断の材料としている。例えば猪年の人は猪突猛進、進んで退くことの知らない性格だと猪の性質に例を引いている。

○…猪は明治時代、大町、北安地方にも記録があったが今は棲息していない。原因は不明であるが、豚コレラが漫延したためだといわれる。

○…猪の幼体は「ウリンボウ」と呼ばれ、毛なみがシマウリによく似ている。猪は昼間は山林深くで、牙で折取った樹枝を集め「仮り間」をつくりねむっている。おもしろいのは「ノタ場」というジメジメした場所で、寄生虫駆除や体熱を冷ずためにゴロゴロ転がり、泥をぬりつける。夕方から餌を求めて活動を始め、彼らの進む所食えないものがないくらい悪食で、ノネズミ、甘藷類など何でも食べる。人間に与える害も大きいので、古くから狩猟の対象にされ、その話は尽きないほど。肉は賞味される。

（さし絵　片瀬健晶　千葉桃司）

四季とりどり 【4】

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料170円（郵送料とも）を現金書留または郵便替為、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。 大町山岳博物館

山と博物館 第3巻第12号 1958年12月20日発行
発行所 長野県大町市TEL（大町）211
大町山岳博物館
印刷所 松本市巾上町 353
信州印刷株式会社